特　集　「第17回日本臨床環境医学会学術集会」　(臨床環境17：71～72, 2008)

学術集会を終えて

―第17回日本臨床環境医学会学術集会（旭川）を終えて―

第17回学術集会会長　高　後　　裕
第17回学術集会事務局　生　田　克　哉

旭川医科大学内科学講座　消化器・血液腫瘍制御内科学分野

2008年７月４日（金）、５日（土）の２日間に渡り、旭川医科大学内科学講座　消化器・血液腫瘍制御内科学分野を事務局として、第17回日本臨床環境医学会学術集会が旭川ターミナルホテルにて開催されました。日本臨床環境医学会の第１回学術集会も、今年と同じく旭川市で開催されており、今回の開催は旭川としては４年ぶりの開催となりました。

第17回学術集会のメインテーマは、「環境と疾患の関わりを考える」でした。本学術集会では、これまでに環境ホルモン、シックハウス症候群など、社会で大きな問題となっている環境と健康に関する諸問題に対して、臨床医学・社会医学・基礎医学・行政・環境・建築など様々な分野の研究者が一同に会し、意見、情報交換を行う、極めて学際的な会となっています。今回の学術集会も、東京をはじめとした全国各地からの参加をいただき、この２日間で約100名の参加者を迎え、活発な議論が交わされました。

シンポジウムは、旭川医科大学健康科学講座の吉田貴彦教授と、北里大学の石川哲名誉教授の司会によって、「臨床環境医学の近未来」と題して行われました。「新しい環境中物質、繊維・粒子状物質による生体影響へのアプローチ」、「環境化学物質によるアレルギー疾患の増悪」、「シックハウス症候群への適切な対応をめざして」、「健康快適な室内環境づくりをめざした臨床環境医学における学際的研究」といった内容が取り上げられ、各分野の最先端の情報をご講演いただき、これらに対して活発な意見交換が行われました。

特別講演としては、徳島大学医学部分子制御内科学教授　曽根三郎先生をお招きし、社会的に非常に注目度の高い「悪性胸膜中皮腫の制御に向けたトランスレーショナルリサーチ」との演題にて、悪性中皮腫における臨床的な特徴や、アスベストとの関係性、さらに今後の分子学的レベルでの治療戦略についてなど、多岐にわたり詳細な解説を交えてご講演いただきました。

ランチョンセミナーに関しましては、日本体育大学大学院教授　大野誠先生より、「内臓脂肪とアディポサイエンス」の演題にて、内臓脂肪とメタボリックシンドロームの関わり合い、特定検診の必要性や、アディポサイトカイン、生活習慣病に関して、興味深い内容のご講演をいただきました。

一般演題は２日間にわたって合計32題もの発表が行われ、非常に幅広い分野からの演題でありましたが、各演題ともに活発な議論が繰り広げられました。その中でも、特に優秀であった演題として、「アルミニウム鋳造による空気汚染は実はプラスチック起原の大気汚染公害であった（第２報）～ヤマハ・タイセイ病で化学物質過敏症が引き起こされる～」（白川病院・野尻眞先生）が会長賞に、また、「茶飲料連続摂取後にニコチン様アセチルコリン受容体関連症状を示した３例の心電図、聴性脳幹反応、瞳孔反応所見と茶葉、茶飲料、果物のアセタミプリド残留濃度」（東京女子医科大学・平久美子先生）が奨励賞に、それぞれ選ばれました。

本学術集会自体が終了した７月５日（土）の午

後には、引き続いて「市民公開講座」が開催され、北里大学大学院薬学研究科公衆衛生学講座教授坂部貢先生に司会をお願いし、「住まいの環境と健康－体によい家、わるい家」と題して、「シックハウス症候群：過去と現在」、「居住環境とアレルギー」、「室内光環境と健康増進・知的生産性の向上」の演題で各分野の第一人者の先生方からご講演をいただきました。休日の午後にもかかわらず、多くの方々に聴講に来ていただき、なかには２時間程度かけて会場まで来られている方もおり、居住環境の問題に対する関心の高さがうかがわれ、本学会の果たす社会的役割は非常に大きいものと感じました。

近年、本学会が関与する諸課題はますます多くなってきており、それらへの社会的関心も高まっている印象を受けた２日間でありましたが、来年度以降も本学術集会によって様々な分野の研究者達が幅広く情報交換を行い、少しでも多くの問題解決につなげ、さらなる社会貢献に勤めていく必要性が感じられました。来年度の第18回の学術集会は、2009年７月３日（金）と４日（土）の２日間にわたって、川崎医科大学衛生学　大槻剛巳教授を会長として岡山市の山陽新聞社本社ビル・さん太ホールにて開催されることとなっております。来年度の学術集会も、さらに多くの皆様の参加を心より期待しております。